秋田でなまはげに会う　　その３

応援すべき徳島少年チームの試合は全て終わった。もうひと試合、あと一日観客席に座りたいというのが親たちの願いだがそれはもう叶わない。尾をひく残念より割り切った諦めに乗り換えることも必要なのだがむずかしい。無念さを振り切ってバス応援団は買い物などをすませたら秋田駅前のホテルへと移動するとのこと。自分たちふたりの泊まる部屋も世話役のＹさんがホテルと交渉してなんとか確保してくれたおかげで二日目も野宿は回避できた。助かった。

せっかく男鹿半島までやって来たことだし、レンタカーもあるということでバス応援団とは別行動で半島巡りをすることにした。まずは男鹿温泉へ。まだ時間が早いせいか人もまばらである。観光ホテルのロビーでお土産を調達し宅配してもらうことにする。レジの女のひとが標準語で応対するので「秋田弁はしゃべらないんですか？」と水をむけたら、「いつもはこんな調子なんですよ」と流暢な秋田弁を披露してくれた。秋田弁度５。さすが接客のプロである。国体の選手団も多く泊まってるふうだった。

昼ごはんがまだで腹が減ったと嫁がいうので、地元の美味しい海産物でも、、、旅人の大風呂敷、豪気なもんである。少し走ると入道崎という北緯４０度ポイントの灯台五十選にも選ばれた観光スポットがあるらしいので立ち寄ることに。道中はやや細い道ながら趣きのある風景が連なる。季節のせいか、どうも北国のさびしげな旅情とは縁遠いのんびりとしたムードである。すぐに入道崎到着。おお絶景ではないか！日本海の水平線が端から端へと連なり、草原の右肩にこじんまりした灯台。夕日が沈む直前の燦然たる輝きを放ちながら西空に浮いている。この場所、この時間に出会えたのが奇跡と思えるほどの絶景である。さすがに岸手の大きな駐車場の奥には大型の土産物屋兼食堂が並びけばけばしい感じだが、圧倒的な自然の風景のおかげであまり気にならない。

ふたりとも１５００円のウニ丼を注文する。やや小振りの鉢に磯の香りがするウニが乗っている。食べてみたが果たしてどのクラスの味なのか？ウニなど食べつけない山のおっさんには判断がつきかねる。味はとにかく「入道崎でウニ丼」が我ながら誇らしい気分である。観光客もそこそこ来ているが混み合うほどでもなく。草原を散策しながら落ちて行く夕陽を楽しんでいる。記念に灯台をバックの写真を数枚とる。「水平線が丸い」と嫁が指差すが丸いのはお互いの腰回りである。さすがに国定公園に指定されてるだけあるなあ。人家もあまりなく、これならなまはげも棲息出来る余地があると感じた。あまり残念会に遅れるのも失礼なので先を急ぐ。半島の西側を海岸沿いに南下すれば男鹿半島のあらかたを走破することになる。

すぐ近くにカルデラ湖を望める展望台があるらしいので登る。木製のデッキの最上階か

らは左右に一個づつの湖が見える。その先に点在する漁村と日本海。東北の香りを乗せた風が吹き抜けていく。西日と競争するように海岸線を走ると、切り立った断崖や海に突き出た隆起が荒々しい光景を演出する。途中に子供達の宿舎をみつけたので御菓子の差し入れを女将さんに託す。途中にナマハゲの巨大な立像。その前で記念写真。ゴジラ岩という奇岩（といっても観光客がいなければわからないほどの小ささ。見立てた人が偉い）もパチリ。夕陽がゴジラ岩の口のあたりに沈むころがシャッターチャンスらしいが逆光でうまく写らなかった。カメラのバッテリーも尽きてしまう。

夕陽が沈む頃に半島の付け根まで戻ってきた。途中でＭさんからの連絡が入り、ホテルの近くに郷土料理の店があるのでそこで宴会をやりましょうとのこと。すこし遅れる旨を伝えて秋田市内までを急ぐ。思ったより早く駅前のホテルに到着。チェックインしようとしたら部屋が無いと言う。ええ？あかんやん！どうもホテル側のミスらしくフロントの女の子がしきりに恐縮している。国体関係者でごったがえす忙しさの中で起きた事故のようだ。他の応援団のみなさんもロビーに集まって心配してくれる。幸い近くの別のホテルに部屋を構えてくらるというので一安心する。あとから合流しますからとそのホテルのフロント係りをのせて車で２分ほどの別のホテルへ移動。なかなかスリリングな展開であった。チェックインを済ませ、ちくりとやさしくフロント係りに皮肉を言ってから宴会場の郷土料理屋へ。

会場についてしばらくするときりたんぽと比内地鶏の入った鍋が出てきた。結果はとにかく精一杯応援ができた満足からか全員の笑顔が秋田の郷土料理を囲む。ビールが進み、鍋の中味がどんどん減っていく。幹事役が面白い話題をふり、座の一同がそれに輪をかけて笑いの渦が巻き起こる。グラスが空き、追加の料理が運ばれてくる。串に刺さった焼き（味噌？）たんぽに、ハタハタ、比内地鶏の皿がずらっと並ぶ。もう宴会時間は楽に２時間を越えている。大笑いする声が両隣りのふすまを揺らしている。「剣道の試合は負けたけど、宴会では徳島が圧勝やな」と誰かの大言壮語。たしかにその通り。当たっている。もう、「どんだけ！」の世界である。仲居さんやおじさんが入れ替わり立ち替わり料理とアルコールを運んでくる。もう料理屋のスタッフ総掛かりでないと世話ができないほどの徳島旋風である。そろそろ食材が切れはしないかと心配になるほど「味噌たんぽ」の串が後から後から攻め上って来て、もう１０本を越えている。ハタハタの固い卵をプチプチと噛み潰す音が座敷にこだまする。もう笑い過ぎて飲みすぎて食べ過ぎて、やれやれというところで入口のふすまが開いた。

「どうれ！」見ると生なまはげ？だ。わらの衣装？を身にまとい、右手には厄よけの包丁、左手には飾りのついた杖（じょう）を持っている。どうやらこの店の粋な演出らしい。「おおう！」と大きな歓声が上がる。酔っていい気分のところに、これでもかというばかりの奇襲攻撃である。盛り上がらないわけがない。なまはげが身体を揺らすたび

に大きな拍手が沸き起こる。さっそく携帯でツーショット写真の撮影会。会場はアイドルグループのライブ会場に早変わり。秋田の生なまはげとの生涯で一度の遭遇を、むさぼるように楽しむ徳島応援団。とても残念会とは思えない。「明日も勝って勝って勝ち続ける様に！おう！」となまはげのエール。なまはげもてっきり祝勝会と勘違いしたようだ。厄よけ祈願の後、悠々となまはげは去っていった。

つづく